

天災兎は平和な世界でISを造りたいようです

ライかぐ推し

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

コードギアスに天災兎のスペックを持った転生者をぶちこんだお話

目次

天災兎はI Sを造りたいようです	1
天災兎は出会ったようです 上	6
天災兎は出会ったようです 下	15
天災兎は取引するようです	27
天災兎は引つ掻き回すようです	40
天災兎は用意するようです	47

天災兎はISを造りたいようです

皇歴2010年、彼女がまだ幼い子供だった時、日本という国は世界から消えた。

この世界の強豪国ブリタニア、その圧倒的な軍事力、世界で初めて実戦投入された人型自在戦闘装甲騎ナイトメアフレームの驚異的な戦闘力の前に既存の兵器が役に立たなかったことと、戦争中に枢木ゲンブが自害したこと
も合わさり日本は敗戦、名前をエリア11へと変え、ブリタニアの属領として生かされることとなった。

それからはもう全てが慌ただしく、割りとお金と権力があつた彼女の両親は彼女と妹を連れてあちこちに雲隠れするはめになるし、本格的な占領が始まってからは昔みたいに自由に外を歩けなくなるしと本当につまらないと感じていた。

なので、彼女は12才の時に家を飛び出した。

「ちよつと造りたいものがあるので」と書き置きを残し、安全地帯と
言う名の牢獄から脱走。

野蛮で危険で安全の保障なんて何一つもない敗戦領土へと彼女は
身一つで足を踏み入れた。

それから五年と少し経って、深夜のフジサン山頂。

日本を象徴した自然の一つで、その荘厳なる風景で人々を魅了して
止まなかったのも昔の話、希少鉱物サクラダイトを採掘するためにそ
の表面積のおおよそ半分を機械に覆われたその様はまるで今の日本
を象徴しているようである。

そこに音もなく上空から着地する人影があつた。

「ふっふっふー、やっぱりザルだね？ここの警備」

当然ながらそんなことはない。

サクラダイトというレアメタルはKMFナイトメアフレームの動力源に使用される
こともあるが流体にすると起爆しやすくなるという特性も併せ持つ。

そのような重要物質の採掘場などエリア11においては総督府を

除くとトツプクラスに嚴重な警戒網が敷かれ、並の人間がそう安々と入れるような所ではない。

いくら単身で上空から侵入するという常識外の方法で侵入したとしても、レーダーなどの警戒に引っかかりすぐさま駐留している警備兵に捕らえられて然るべきである。

だが、そんなものはこの天才天災の前には無力であった。

「さてさて、お目当てのサクラダイトはどっこっかっかな」

頭につけていたウサ耳型のレーダーを両手に持ち、ダウジングのよう
に採掘されたサクラダイトの保管庫へと歩みを進める。

通路内に設置された最新鋭の監視カメラに彼女の姿が映ることが無く、高度なロックが掛けられたはずのセキュリティゲートもまるで彼女が本来の主であるかのように容易に開き、何物にも止められることは無く彼女はそこへとたどり着いた。

「予定通り一分分……いや余分に二・三体分貰っていいのかな」

手元の端末を操作し、必要な分のサクラダイトを近くにあった搬送用大型トラックに積み込んでいく。

順調に積載を進めていき、最後のサクラダイトを積み込んだところで異変は起きた。

「ん？ あれれ？」

別端末から通知音がなり、確認すれば数名がここへと向かってきている画像が映し出されている。

「スケジュールには無かったし、抜き打ち検査？ ま、元々派手にするつもりだったから特に問題ないかな」

どこから取り出したのか、明らかに生身の人間が持つべきではないサイズの物体、全長4メートルを超える大型のレールガンを何の躊躇も無く搬入出用の出入り口へと発射した。

作業時間外であるため硬く閉じられていた対テロリスト用のシャツターは無残にも破壊され、それを確認する前に彼女はトラックに乗り込み、エンジンを始動させ、アクセルを全開にして猛スピードでそこから飛び出した。

「な、なんだ!？」

近くまで来ていた作業員は突然のことに戸惑うが、すぐさま破壊された出入り口と飛び出したトラックを確認し何が起きたのかを凡そ理解することが出来た。

「本部！　こちら格納庫、サクラダイトが何者かに盗まれた！　犯人は大型トラックで逃走中！　至急応援を！」

「♪」

鼻唄まじりにトラックを操る彼女。

ふとミラーを見れば彼女を捕らえようと追跡してくる戦闘ヘリとKMFが数機確認できた。

「残念だけど、それじゃあ東さんを捕まえることはできないよ」

そう言って懐から丸い物体を取り出すとそれを無造作に窓から外へ投げ捨てた。

彼女の手から離れて数秒後、それは全体から白い煙を発生し追手の視界を塞ぐように広く展開した。

とても手のひらサイズの物体から出たとは思えないその煙に少し驚いた追手だったが、直ぐにKMFのセンサーを展開し煙に突入したところで異変は起きた。

『センサーに異常!?　どうなっている!?!』

『くそこっちもだ！　全面真っ白で何も見えない』

『スピードを落とせこれでは、うわあああああ!?!』

煙に触れた途端、センサー全てに不調が生じ、何名かが危険を感じて止まろうとするが対応できなかつた数名が猛スピードのまま突っ込み、コースアウトして木々に突っ込んだり、味方を巻き込んで派手に転倒したりと散々たる有り様を晒していた。

『追走していたKMFは謎の煙幕により行動不能、我らだけでも追跡を……、何だあれは!?!』

戦闘ヘリのパイロットが目にしたのは人形の何かだった。

全身を黒い鎧のようなものに覆われた人間に巨人の手足を取り付

けたような不可解な格好のそれは戦闘ヘリの前方に立ち塞がっていた。

それが只の不審者ならパイロットもそこまで取り乱すことはなかっただろう。

しかし、問題はそれがいた位置がヘリの真ん前だったということ。そう真ん前、つまりはその人形の何かは空中に浮かびヘリと同高度に佇んでいたということ。

さらにその右手には身の丈ほどの日本刀が握られていたと言うこと。

それが何を意味するかということとは、想像に難くない。

』

戦闘ヘリが何か行動を起こすよりも早く、それは刀を構え、ヘリへと突撃した。

それは二回刀を振るつた、一度目は眼前のヘリへ、二度目は少し後方にいた二機目へと。何れもすれ違いざまにヘリのメインローターを斬り落とした。

揚力を失ったヘリは墜落し、地面へ激突する前にパイロットたちはパラシュートにて脱出することに成功する。

生きていることに安堵するパイロットたちだったが、すぐに自身を斬りつけた犯人のことを思いだし辺りを見回すが既にその姿はなく、まるで幻であったかのように影も形も捉えることはできなかった。

ただ眼下に広がる惨状と遠くに走り去っていくトラックだけが、あれが現実であったと証明していた。

「いやあ、大漁大猟の大量だねー、これだけサクラナイトがあれば思う存分私謹製KMFが造れるよ♪」

盗品の山を前に満足げに微笑む彼女。

年相応の少女のように笑ってはいるが、彼女がしでかした所業とそ

れに関する被害を考えればとても笑ってはいられないはずだ。

「何から造ろうかな、やっぱドリル？ それともビーム？ 変型合体も捨てがたいよねえー」

だが彼女はそんなことは気にしない。

それが彼女が彼女として生きていくと決めた際に決意したことの一つであり、あれだけの騒動で死者を一人も出さなかったのだから彼女の的にはそれで充分配慮したと考えていた。

「早くブリタニアを何とかしないと安心してアイエスISも造れないんだよね、悪用されるのが目に見えてるし、ナンバーズ制度がある内は差別を加速させるだけだから造りたくても造れない、ままならないものだよねー、君もそう思わない？」

そう言つて視線を向ける、そこには先の事件でへりを斬り落とした人形がそこにいた。

その名前はゴーレム白騎士、彼女が元から持っていた知識と、今世で生まれ持った知能を合わせることで何とか理想の姿へと近づけることができた第一世代型ISの試作機である。

本来なら有人機であるそれを無人でも使用できるように改造したためにパイロットはいない、故に答えなど返ってくるはずもないのだが、彼女は話を続ける。

「いや、実際な所私でなくてもいいんだけど、これ、設計どおりできたとしてもパイロットがいらないんだよねえ、並みの乗り手だとほぼ死ぬし、だけどパイロットを探す暇も人手もツテないし、だからと言って私の可愛いこの子を他人に渡す気にもなれないし」

ワンマンアーミーにも限度があるしね、と言つて彼女は手元の設計図に視線を落とす。

「ま、そこは焦っても仕方ないし、地道に一步步つやってこか」
そうして彼女は作業を始める。

それはシンジクケットーで大虐殺が起きる少し前の出来事。

天災と魔王が出逢い、ブリタニア相手に反旗を翻すのはもう少し後のお話。

天災兎は出会ったようです 上

《ピピピピピピ！ キケン！ キケン！ 危ないよー！》
「んん？」

東の研究室に緊張感のない危険を告げるアラームが鳴り響く。

東は作業を止め、近くにあった大型のタブレット端末を手に取る。

「あれー、もしかしてバレた？ 絶対に証拠残すようなへましてないはずなんだけど」

写し出されたのはシンジユクゲッターの全体図、並びにあちこちに設置された東専用の監視カメラの映像。

見ればシンジユクを取り囲むようにブリタニア軍が配置させていて、既に何機ものKMFが侵入している映像が映し出されていた。

「……あ、違う違う私じゃないや」

隅々まで目を通し、普段は見かけない異物を見つけた。

それはろくに整備もされてない廃墟に突っ込み、走行不能になったトラックの映像。

「ははくん、なるほどなるほどこのトラックを追って来たわけ……ん？」

トラックの中から出てきたのはルルーシユ・ランベルージュブリタニア軍人、それと拘束服で身動きを制限された緑色長髪の美少女C.C.だった。

「学生は巻き込まれで、軍人は今さっき入ったとして……じゃあアイツらの目的つてもしかしなくても女これ？」

少し興味が出てきたので東は今までミュートにしていた盗聴器からの音量を上げる。

次いでにここも危ないかもしれないので端末片手にさつきまでやっていた作業を中断、片付けに入る。

そうして盗み見すること少し、事態は急変する。

「あ、撃たれた」

トラックを追っていたブリタニア軍の歩兵部隊が彼らに追い付いたのだ。

彼らはその場にいた方の軍人、いや東が聞いたところによると名誉ブリタニア人のスザクに学生と女を殺すように命令するがこれを拒否、スザクが背後を向いた瞬間に彼らが発砲したという所だった。

「ま、武器も持てない軍人とお荷物二人じゃこうなるよね」

こういう生活をしていると似たような場面はいくらでも見たことはある。

人と言うものは強い立場になると弱者に力を振るわずにはいられないのか、ブリタニア人が日本人を虐げるなんてエリア^日11^本じやよくあることだ。

酷いものだと言物や殺人などもあつたりするが、基本的に東は助けない。

一々助けていたら研究する時間がなくなるし、そもそも他人にあまり興味が無い。

彼女の元となったオリジナルもそうなのだが、彼女も他人に興味を持つどころか見分けることもままならない。

辛うじて家族は見分けられるのだが、同じ日本人でも興味がわかなければ次ぎ会った時には存在を忘れたり、外国人となるともうほとんど同じ顔に見えて見分けられなくなってしまふ。

それほどに彼女は他人に興味が無い。

きっとこのまま殺されるであろう二人も明日になれば彼女の記憶から消え、またいつも通りの研究漬けの日々に戻る、かに思われた。

「あ」

絶体絶命かに思われたその時、突如トラックが爆発した。辺り一面に煙が舞い、一気に視界が悪くなる。

衝撃でカメラにひびが入り、盗聴器が拾う音も雑音が多く故障したように思われる。

しかし、それでもブリタニア軍人たちの戸惑いや怒声が聞こえ、煙が晴れた時には彼ら二人がいなくなっていたことからあの隙を突いて逃げ出せたと考えるのはごく自然なことだった。

「他に誰かいて自爆した？ それはいいけど、……これはちよーつと不味いねえ」

兵士たちがどこかへと連絡を取った直後からシンジユク周辺に配置されていたブリタニア軍の動きが急に慌ただしくなり、先の比じやないほどのKMFや兵士をここへと出撃させ始めているではないか。

これが意味することは一つ。

「シンジユクの住民ごと皆殺しつてことだよね〜」

超短絡的、と彼女は付け加える。

「んー、流石にこれは何かしたほうがいい?」

幾ら隠蔽してあるとはいえ、この隠れ家が見つかる可能性はゼロではない。ならば私は何をすべきか、と彼女は考える。

「あれは何時でも出せるけど、なんか時期尚早な気がする、総督を殺つてもまた別の人が来るだけだし、……いや、そもそも何で皆殺しつて結論になったのかな?」

ふと、束は思った。

確かに毒ガスなどの危険物がテロリストに奪われたなら住民ごと抹殺も有り得なくもないが、少女一人に対する反応としては過剰過ぎる。

つまりはあの緑色はブリタニアにとつてとても重要で、尚且つ絶対に外に漏れては不味いものと言うことになる。

「ちよつと気になるなー、……えつと、どんな顔だったっけ……あぁうん、こんななんだった」

既に忘れかけていた顔を記録されていた動画を見返して思い出す。

ついでに忘れないようにそこだけ切り抜いて保存する。

「えつとあの辺りから予想される逃走ルートは地下で、そこに仕掛けたカメラはこれとこれとこれと、……よし見つけた流石私!」

配置してあった監視カメラの映像を順に廻っていき、その一つに彼らが走っていく映像が記録されていた。

そこから逃走先を割り出し、USBメモリに似た漆黒のKMFの起動キーとどこかの漫画で出てきそうな単眼式 ヘッドマウントディスプレイ H M Dを装着する。

「動作確認良し、マップ確認、ターゲットの画像入力完了、よしよしオールオツケー! じゃあ行きますか!!」

HMDに逃走予測ルートが表示されたのを確認すると、束はすぐさまに秘密基地を飛び出した。

「えっと確かここのはずなんだけど……何これ？」

HMDに表示された座標通りに彼らがたどり着いたであろう廃墟へやって来た束だったが、そこにあるのはほぼほぼ死体のみであった。

額を撃たれた緑色の髪の女と虐殺された日本人と笑顔で拳銃自殺したブリタニア軍人の死体。

「日本人とこの緑女の死体は良いとして、いや私的には良くないけどそれは置いといて、何で死んでるのこいつら？」

服装からして彼らはあの学生を追いかけていた奴等で間違いない。日本人と緑色を殺したのもこいつらだろう、と束は推理する。

しかし、それだと解せない点の一つ。彼らが明らかに自殺していると言うこと。

「笑顔で死んだのだから多分発狂したわけではないよね、けどそんなことする理由なんてあるわけない、例えば皇族からの命令でも喜んでやるほどブリタニア人が狂ってるって聞いたことないし、となれば……催眠や薬ドラッグ関係？」

不可能ではない、しかしその可能性はかなり低いと言わざるを得えない。

「けど、そんなのあるなら最初から使うはずだし、何より緑色とあの兵士が死なずにすむよね、うくん？」

悩むが答えはでない。

そもそも推理するには材料が足りなすぎる。

「ヒントがあるとするなら、さっき出てったサザーランド？　パイロットっぽい人がここにいてってことは奪われちゃった？」

そう言っつて視線を下に向ける。

具体的には彼女の足元で気絶している褐色のブリタニア人女性に。どうして彼女がこのような場所で気絶しているかという点、ただ運がなかったという一点に尽きる。

特殊な事情により自身のKMFを失った彼女はほんの数秒程度呆然とした状態にあった。

気を取り戻した彼女が最初に見たのはKMFを失った自分自身と、地下から床のコンクリートを破壊して現れたウサミミを着けた怪しい少女。ひゃっはー!!と無駄に叫んでいたのはご愛敬。

一瞬思考が停止しそうになるが、相手がイレブンと認識した彼女は素早い動きで拳銃を抜き、発砲した。

放たれた弾丸は一直線に彼女の側頭部へと迫り、直前で彼女が手に持っていた螺旋状の突起物、つまりはドリルに弾き落とされた。

驚愕するも二発目を放とうするが、その前に人間離れた速度で接近した束の両足が彼女の頭部を挟み込み、そのままバク宙の要領で後方に回転、下半身の力のみで彼女の持ち上げ——そのまま固い地面へと叩きつけた。通称、《フランケンシュタイナー》と呼ばれるプロレス技の一種である。

激しく後頭部を打ち付けた彼女はそのまま気絶、おそらくは一、二時間程度では起きることはないだろう。

「この外にはカメラつけてたけど、中までやんなかったのは失敗だったかな？ ま、そもそも想定外のことしてるから反省しても意味無いけど」

それよりも、と呟き彼女は半回転して歩き始める。

近場で転がっている死体を器用に避け、緑髪の女へと近づくと

「にしてもまさか殺されるとは予想外、生死問わずだったのかそれとも元から殺す予定だったのか……いや、多分部下の独断な気がするなー勘だけど」

とりあえず死体だけでも回収しておこうかなとか、何で捕まっていたのか検査しようかなとか、ただそれだけの軽い理由だった。

「……………う？」

すぐ傍まで来ると束は何か言い表せぬ違和感を覚え、そのまま彼女

は上からジツと覗き込んで——気づく。

「あれ？　なんで生きてるの？」

額を撃たれて生きている人間など一部の例外を除いていない。

彼女の場合は額のだ真ん中を撃ち抜かれていたので生きている可能性はあったが、明らかに致死量以上の出血をしていたことから一目で束は死んだものと判断した。

しかし、今まで何度か見てきた死体と何か違うと束の理性が告げていたし、よくよく観察すると僅かに胸が上下に動いているのが見てとれた。

「——ほう、よくわかったな」

死体だったはずの女が口を開く。

ゆつくりと上体をあげ、立ち上がる。

その際に前髪の間から額を見ることができた束だったが、——そこに銃創など初めから無かったかのように綺麗な肌が覗かせていた。

「束さんは特別だからね！　近づかなくてもその程度のことならお茶の子さいさいさ」

（高速治癒……じゃない、流出した血液の補充や脳関係の損傷まで治すならそれはもう治癒じゃなくて不死って言った方が近い、そして緑が驚いてないってことは多分死に慣れてる、一度や二度じゃない、ならブリタニアが隠そうとしたのは不死の実験？　ならこいつはそれの成功例？　…違う、一から造り出すタイプの実験なら尚更こんな危険なところじゃない、本国の最重要施設か人がほとんど来ない僻地の二択、となればこれは偶発的に発生したもので量産体制は整ってないということ？　……これ以上先は考えるだけ無駄、後で確認しよう）

束は器用に別の事を考えながら話す。

「で？　あなたは どうするの？　このままだと捕まるのも時間の問題じゃない？」

「さあな、お前には関係ないことだ」

そう無愛想に返す彼女。

「ふくん、まっいつか、謎は増えたけど知りたいことは分かったし次はやっぱりあいつかな」

「あいつ?」

「さっきの学生」

詳しくは不明だが、KMFを奪い、人を自殺させる謎の力、幻想に思えた不死が目の前にあるのだから恐らくこちらも超常的な何かである可能性がある。

常識では計り知れない未知なる現状を前に彼女が興味を引かれなはずがなかった。

それを知らない彼女は訝しげに束に尋ねる。

「……何故あいつに会いたがる?」

「これやったのは多分そいつでしょ、どうやったらできるのか、ちよつと興味が出てきたからね」

たとえ違つたとしても何か手がかりにはなるかもしれない。目の前の無愛想女は話すタイプじゃないし聞くだけ無駄と判断した束は学生の方から調べることにした。

「監視カメラと空中ラボの超々高性能カメラでこつから出てつたKMFを追跡すれば、はい!見つけた流石私!」

HMDを操作して、ものの数秒で目標を発見。

早速、彼の所へ向かおうとした束だつた――が、それを制止するように背後から一発の銃弾がそのすぐ傍に着弾する。

「ん、別に私が何処に行つても関係ないと思うけど?」

アゴを上げ挑発的に見下ろすように彼女へと視線を向ける束。

「ああ関係ないな、だが流石に今ちよつかいを出されては私が困る」

何時の間にか軍人の死体から奪つた拳銃を束へ向ける。

「なに、暫く大人しくしていればいい、余計な事をしなければ命までは取らないさ」

そう言つて彼女は束をこの場に留めようとする。

あの力があればここから逃げ出すことなど造作もないが、今日の前にいる訳のわからない女が何をするか分からない。最悪足を引つ張つて彼が死ぬこともあり得る。彼が死ねば彼女の目的を遂げるのが困難になってしまう、彼女としてはそれは絶対に避けなければならぬ。

束が一瞬で女軍人を倒したのは目撃していたし、自身では敵わないだろうということも薄々分かっていた。

だからと言って何もしない訳にはいかない、彼女にできるのはできるだけ時間を稼ぎ、少しでも彼が脱出する可能性を上げることのみだった。

「ふくん……………ねえ」

しかし、その思惑は束の思わぬ行動によって破綻する。

「心配だったらあなたも来る？」

「……………正気かお前？」

思わず聞き返してしまう。

無理もないだろう、今まさに銃口を向けている相手にかけるような言葉ではない。

少年少女が友達に声をかけるような気軽さで、一歩間違えば自身の命を奪いかねない相手を誘うなど正気の間人がするような行動ではない。

「正気も正気！ その程度で殺られる束さんじゃないし、何よりあなたも気になるんでしょ？」

「……………でどうやってあいつを追うつもりだ？ まさか走って追うわけじゃないだろう？」

話しても無駄と感じた彼女は拳銃を下ろす。ここで効果がない脅しをするよりも束に近づいて隙を窺った方が良いと考えたからだ。

「勿論、こうやって☆」

束は懐から取り出したKMFの始動キー、その先端付近に設置されたボタンを押す。

「——な!？」

少しの静寂の後、激しい衝撃と土煙が彼女を襲う。

反射的に片腕で顔を庇う。

何が起きたのか、それを説明するのはとても簡単なこと。

上空から降ってきた何かが廃倉庫の天井を突き破って束の直ぐそばに着地したからだ。

少しずつ煙が晴れ、降ってきた何かの正体が明らかになる。

それはKMFだった。正し現存するどの国のKMFとも当てはまらない異質な機体。

おおよそ人間に近いフォームなのは共通してはいるが、逆に言えばそこしか共通点がない。

全身に漆黑に染め、関節を中心に機体のあらゆる部位を樹脂でできた筋肉のような物体が覆い、サザードと比べると細い印象を受けながらもまるで日本武者を思わせるような力強さを感じさせる体格、両腕に盾のような物が付いてはいるがそれは機体全てを覆い隠せる程ではなく、武装と言えば左腰に提げている大型の日本刀に似た何かしかない。

一般のKMFに付けられているはずのランドスピナーもスラッシュ・ユーカーンもなく、また射撃武装すら装備していないそれを背にし、束はこう言った。

「さあさあご覧あれ！ 現行する全てのKMFを凌駕する、最高性能ハイエンドにして唯一無二！オンリーワン 束さん謹製汎用型KMF試作一号機、その名も――黒桜！」

天災兎は出会ったようです 下

「さて、準備はいい？ 複座式じゃないから座り心地は良くないけど、一応は一人分程度のスペースは空けてあるから座れないことはないはずだけど」

東はコンソールを操作しながら話しかける。

「確かに、良くはないな」

東の後方、正確には東が座っているパイロットシートの直ぐ後ろから返事がくる。

東がチラリと目をやると、パイロットシートと外壁の間に設けられた狭いスペースに三角座りしている女の姿があった。

「じあき、そこに荷物固定用のシートベルトがあるんだけど、それを念入りにきっちり完璧に、体に密着させておいてね」

「？ 随分と念を押すな」

疑問に思うも素直に指示に従う。

「いやあく、今思い出したんだけど、この子には二つほど欠点があつてね、いや、私が乗るだけなら欠点でも何でもないんだけど、一般常識に当てはめての話ね」

「……いいから早く言え、嫌な予感がする」

額から嫌な汗が流れる。

「まず脱出装置なんて付けてないこと、私が負けるなんてあり得ないし」

「自信過剰なのは結構だが……もう一つは何だ？」

「この子は私が乗る為に設計した機体だからね、一般人が乗ることをまっつっつたく考えてないっこと」

「……つまり？」

「普通の人がこの子のフルスペックを引き出そうとすると、Gで死ぬ」「ちよつと待て、それは大問題じゃ——」

「はい、機体に異常なし！ それじゃあ無駄に死にたくなかったらちゃんと固定しててね!!」

彼女の言葉を遮り、束は機体の片膝をつかせ両腕をやや前方の地面に軽く着ける、所謂クラウチングスタートの姿勢を取らせる。

これが意味するのは、たった一つ。

それを察した彼女は急いでシートベルトで念入りに体を固定し始める。

「それじゃー！ いくよー！ー！！」

ペダルを踏み込み、文字通り黒桜を走らせる。

「ひゃっはー！ー！ー！！」

まるで人間のよう走り出したそれはサザールランドを軽く凌駕するスピードでシンジユクを駆ける。

目標に向けて一直線に、最短ルートを走る。

廃車や瓦礫を踏み砕き、器用に人間を避けながら走る。

『何!?!』

『うわああああ!?!』

ルート上にいた敵KMFは手刀にて頭部を切断、センサーを破壊されサザールランドは行動不能に陥る。

味方のKMFが撃破されたのを知ったブリタニア軍は急ぎ正体不明のKMFを撃破を目的に行動を開始する。

だが――

『はや――』

『攻撃が当たらない――』

彼らが狙いを付けるより早く、束は彼らに接近、一機のKMFを掴むとそのまま直ぐそばにいた別のKMFへと投げつけた。

『ええい！ こうなれば味方ごと！』

部隊長らしき軍人は同士討ちよりも目の前の正体不明機の殲滅を優先、味方ごと周囲に配置されていた部下へ攻撃命令を下す。

「ふはははははー！ 判断が秒単位で遅いおそーい！」

しかし、撃ち始める頃にはその場に姿はなく、既に別のKMFに向けて跳躍、その勢いそのまま横回転、目の前のKMFに回転蹴りを喰らわせる。

『うわああああ!?! がっ――』

両腕で防ぐも完全に威力を殺すことはできず、吹き飛ばされて背後にあつたビルに激突、中にいたパイロットは衝撃で気絶することになった。

『今だー!』

最も彼女の近くにいたKMFがスラッシュハーケンを放つ。

味方を撃墜されたが背後を見せた今が最大の好機と考えたからだ。実際それは間違いではないし、束も一応は人の子なので後ろに目がついているわけではない、故に背後を見ることはできない。

「ほいっと」

まあ、だからと言って避けられないわけではないのだけれど。

束は機体を右に少し動かしただけでそれを避ける。

ついでにスラッシュハーケンのワイヤーを掴み、思いつきり引つ張った。

『くっそー!』

パイロットは危機を感じ直ぐ様に脱出装置を起動させ、離脱。

抜け殻のみが彼女の下へやってくるが、そんなものは彼女には関係ない。

突如意味もなく拡声器のスイッチを入れ、次の相手にこう言った。

「はい♪、これあげるー」

『はあ?!』

突如謎のKMFから発せられた少女らしき幼い声、そしてそれと共になげ飛ばされた味方の機体に思考が停止する。

この場においてそれは最大級の禁忌であり、それによって彼は脱出すらする間も無く味方の機体と衝突、両機とも派手に破壊される事となった。

幸いだったのは当たり所が良かったのか機体が爆破しなかったこと、それにより重傷を負ったもののパイロットが生きていたことである。

『何なんだ……何なんだあれは!?!』

『あんな物をイレブンが持っているはずがねえ!! くそ! 一体どこ
のどいつだ!!』

初めは数の差で押しきれれると思った。

いくら性能が良くても、ブリタニアに勝るものはない。イレブンごときに負けるはずがない。そう思っていた。

だが実際はどうだ？

あつという間に半数が撃破され、その上あちらは無傷で腰の武装すら使つてはいない。

素手だ、素手で半数が撃破されたのだ。

これを少し前の自分に伝えたところで絶対に信じないだろう。

いくらKMFでも素手のみで六機のKMFを無傷で破壊することなどできるはずもないのだから。

動揺は部下へと伝播し、連携に淀みが生まれる。

本来揺るぎない精神と精密なKMFコントロールを以って行われるはずのそれは機能を失いつつあり、最早烏合の衆と大差ない状態となっていた。

『墜ちろー！ 墜ちろお!!』

『この、イレブンごときが!!』

命令を無視した勝手な攻撃。

その様な精密さを欠いた攻撃が束に効くはずもない。

弾丸の殆どは鎧に弾かれ、柔らかい関節部は束が狙いをずらしてカバーすることで恰も無敵のようにみせかける。

『ぎーんねーん、効かないよー』

そう言つて束はまだ持っていたKMFの残骸、二つのスラッシュハーケンを投げつけた。

それらは吸い込まれるように片方はサザーランドの頭部に、もう片方は胸部へと直撃し戦闘不能に追い込む。

ふむ、と一度頷くと残り四機の位置が固まっているのを確認し、妖しく微笑みを浮かべながら次の動作へ移る。

「動作テスト並びに耐久テスト終了、じゃあ次はこれとこれかな」

ゆつたりとした動きで腰に提げていた刀を抜く。

漆黒の刀身に濃い紫色の刃文が波打つそれは日光を反射して妖しく煌めく。

人を惹き付ける妖刀とも、稀代の刀匠が打った名刀にも見えるそれを、水平に構える。

刀を持つ右腕を頭部と同じ高さへ構え、空いた左腕を切っ先へと添える。

それは彼女が昔一度だけ見たことがある技で、そこに束のアレンジを加えたもの。

特に思い入れもないが、突破力と早さからこの技を選択する。

「両脚部、腰部後方、両肩部装甲展開」

拡声器を切り、すばやい指捌きで機体を操作する。

走る、握る、殴る、跳ぶなどの動作は予め決められたコマンドキーやペダルを踏むだけで行動できるのが一般的であり黒桜もある程度は簡略化してあるのだが、今回束はそれらを使わず直接備え付けのコンソールを使用して細部まで指示を下す。

それは戦場ではまず使われることは無い。あつたとしても非常時くらいのものだ。

操作に時間を掛ければ掛けるほど、こちらの動作が遅れるのは自明の理。

動作が遅れると言うことはそれだけ戦死する可能性が跳ね上がるということ、そんなことはKMFに乗る人間ならば誰でも理解していることだ。

なぜ束がそんなことをしているのかと言えば——ただ単純に使用しても問題ないからと言うことにつきる。

人間離れた身体能力にコンピュータ以上の情報処理能力。

この二つが合わされば戦闘中にKMFのOSを書き換えることすら可能となる。

「エナジーよし、展開完了、これで」

両脚部の外側、腰部後方、両肩部の鎧がまるで翼を広げるかのように展開する。

そうして彼女が最後のコマンドを入力し終えた時、その場にいた軍人たちは目を疑った。

消えたのだ、目の前にいた不気味なKMFが。突如視界から消失し

ただ。

『え?』

『馬鹿な!』

その数瞬後、残り四機のサザーランドがほぼ同時に戦闘不能へと陥った。

頭部や胴部、はたまたその両方を破壊され、一步も動くことができなくなっていた。

脱出装置を使う暇もなかった。それどころかいつ撃破されたのかも見えなかった。

「はい終わり♪」

あの一瞬だけ、束は彼らの認識の外にいた。

カメラが捉えるより速く彼らへ接近、一突きめで先頭にいたKMFの頭部を破壊、素早く引き抜きその後方にいた二機目に上方からの突きで胴体を貫通、刃を横に引き抜くことで切断する。

束は刀を最初の構えに戻すとその更に後方に横並びになっている二機の頭部を機体の軸を中心に回転した横薙ぎの一閃で切断、その勢いのまま二回転目で胴を切断した。

全てが終わると刀を納め、開いていた装甲も元の鎧状態に移行する。

これはこの世界にはない技術で造られたもので束はこれを《展開装甲》と呼ぶ。

本来これはISに搭載される予定だったものだったが、その前にKMFで試験運用しようと考えた束は鎧という形で頭部以外の全ての鎧に展開装甲を組み込んでいる。

展開装甲は装備の換装無しでの全領域・全局面展開運用能力の獲得を目指した第四世代型ISに組み込まれた特殊装甲で、この装甲一つでスラスター、エネルギーソード、エネルギーシールドにもなるという万能装甲である。

展開された装甲から発せられたエネルギーが機体を加速させ、元から持ち合わせていた驚異的な機体性能と合わさることによって、まるで瞬間移動と錯覚するほどの移動速度を発揮することに成功した。

ただし、それはパイロットが束だからこそ出来た芸当であり、並みのパイロットではまず制御することすら難しいことを忘れてはならない。

一歩間違えれば、そう例えば展開する角度、出すスピード、更には移動ルート of 算出、行動中に発生した誤差の修正などのどれか一つでも間違えてしまえば忽ちその驚異的な速さは自身への脅威へと打って変わり、パイロットを死に至らしめるだろう。

「うーん、予想よりエンジンの消費が一割五分ほど多いけど……ま、こんなものかな」

束はその場を後にする。

場所は変わり、G-1ベース、日本の統治を任された第三皇子クロヴィス・ラ・ブリタニアが搭乗する皇室専用陸戦艇であり、移動指揮所をも兼ねる。

本来ならばこんな作戦はすぐに終わり、目的の女も回収することなど容易いはずだった。

だが、現実はどうだ？

「何だ、今度は一体何が起きている!?!」

テロリストどもがこちらのKMFを奪い、あまつさえそれを使ってこちらを徐々に撃墜していく始末。

まるでこちらの作戦を全て知っているかのような動きでブリタニア側のKMFが狩られていく。

焦ったクロヴィスは急遽兄シユナイゼル直属の特別派遣嚮導技術部、通称《特派》の新型KMFの攻撃を決定する。

新型の性能は素晴らしく、次々に敵KMFを撃破していく。

兄にいらぬ借りを作ってしまったが、致し方ない、これでアレを

秘密裏に回収することができ……はずだった。

だが、あれは何だ？

ものの数分で十二機のKMFを撃破し、一直線にどこかへ向かう謎のKMF。

性能だけみればこちらの新型と同等と思えるそれが、なぜこんな場所に出てくる？

あれは試験機とはいえ第七世代だぞ!? イレブンごときがそんな物をもてるはずがない! あつてはならない!

「殿下! 特派の新型が所属不明KMFに接敵しました!」

「何だ?!」

しかし、彼に追い討ちを掛けるように、事態は悪化の一步をたどる。まるでこの地で好き勝手な圧政を強いたことの報いを受けるかのように、理不尽に、急速に、確実に、彼の喉元へと凶刃が迫りつつあった。

『やつほー、元氣ー? 生きてるー? ちゃんと呼吸してるー?』

気の抜けた女の声が聞こえる。

自分の目と耳が狂ってなければその声は目の前の見たことの無いKMFから発せられたように思える。

何だ、何が起きた？

まずテロリスト共に指示を与え、ブリタニア軍への反攻を開始しそれは順調だった。ここまではいい。

だが、想定外のイレギュラーが現れた。

ブリタニア側の新型KMF。

あちらの切り札か何か知らないが、こちらの駒を次々と排除し、この俺の居場所を探し当て攻撃をしかけてきた。

まさに絶体絶命、そう思った時だった。

『ちよつと邪魔だよ、どいて』

突如、背後から壁を突き破って侵入したソレが、新型を蹴飛ばしてビルの外へと追いやった。

で、現在カメラの前で手を振ったりふざけた真似をしてはいるが……正直なところ危ないところを助けられたのには違いない。

「ああ、問題ない、そちらはどここの人間だ？　ここにいたテロリスト共とは違う勢力のようだが」

こちらの駒を一蹴していたあの新型を弾き飛ばすほど強力なKM Fがあるのならもっと早く出撃させていたはずだ。それこそブリタニア軍がここに入る前、シンジユクゲッターを包囲し始めた辺りに総督へ襲撃をかけることこそが、最も効果的な方法だった。

それをしないのはこいつが別勢力で動いていることを示す。

つまりさつきまで駒として使っていたテロリスト共とは関係のない人物ということになる。

まずはそこをはっきりとさせる必要があった。

『ふっふっふー、残念ながら私はどこにも所属してないんだなーこれが、所謂単独勢力ってやつ？　まあ、しよつちゆうブリタニアから色々奪ってるからテロリストってことにはなるんだろうけど!!』

ふざけた口調ながらも、こちらの質問に答えるソレ。

『で、君に一つ聞きたい事があってさー、向こうで拳銃自殺してたブリタニア軍人の集団があっただけで、それをやったのは君であってる？』

一瞬、思考が停止しそうになる。

馬鹿な、あれは誰にも見られてはいないはず。その場にいたイレブンも拘束服の女も射殺された、この力を使いブリタニア軍人も始末し、あの場にいた生き残りは俺一人のはずだ。それを、こいつは何故知っている？

「……それは」

『あー、やっぱり今はいいや、反応で大体わかるし、時間もないみたい』
そう言っただけは外を見る。

そこには今まさにスラッシュハーケンが突き刺さり、さつきの新型が再度突入しようとしている所だった。

『ん〜あれがいると内緒話ができないなあ……、ねえねえあれって何とかした方がいいの?』

「ああ、できればそうしてくれると助かるが」
「できるか?」と暗に問いかける。

『もつちろん! 新型だろうと旧型だろうとこの私特製KMFが負けることなんてあるはずがないんだよ!』

そいつは自信満々にそう答える。

「ならばしばらくの間そいつの相手を頼む、こちらはやることがあるからな」

『足止めだけでいいの? 他のKMFとかは?』

「それは……問題ない、足止めさえしてくれれば充分だ」

出来れば護衛を頼みたい所だが、そこまでこいつを信用は出来ない。
い。

この力を使うなら一人の方がよい、何より俺とナナリーの素性が露見する可能性は少しでもあってはならない。

『OK! なら後で話しかせてもらうね』

そう言っつてそいつは駆け出し……突入してきた新型ごと外へと落下していった。

「……何だったんだ、あれは」

気にはなるが、今はそれよりやることがある。

そう思い直し、KMFを総督がいる本拠地へと向けた。

《おまけ》 戦闘終了後のシンジユク

「う……」

死体が溢れる廃墟で一人の女性が目を覚ます。

「……は……」

ふらふらとおぼつかない足取りで外に出る。

生気を感じさせないその動きは、第三者から見ればまるで病人か、

幽霊のように思われたことだろう。

「あ——」

外に出た途端、何かにつまずき転んでしまう。

その時に何かを落としてしまったようだったが、今の彼女にそれを気にしている余裕はない。

意識が朦朧とする。考えがまとまらない。

「おいあんたー！ 大丈夫か!!」

誰かが彼女に駆け寄ってくる。

そちらを見てはみるが、ぼやける視界では恐らく男性だろうということくらいしかわからない。

視界が定まらない、記憶が浮かび上がっては消えていく、聞こえてくる音も雑音が混じるようになり、何が何だか理解することができない。

「ナイト、ア……うばわ、私は……」

うわ言の様につぶやく。

「ナイトア？ ……もしかしてKMFのことか？ ！ おいあんたまさか、あの通信の奴にやられたのか!？」

男は、扇要は今日あった出来事を思い出す。

自分たちにブリタリアのKMFを提供した謎の人物。

声から男だろうということは推測できるが、もしも合成音声だったのならこれも意味は無い。

あの機体が彼女たち軍人から奪われたということなら、この女は謎の声の人の正体を知っている可能性がある。

そう思って問い詰めたが、運悪く彼女はそこで力尽きて気絶してしまふ。

「おいー… おい!! ……仕方ないか」

扇は彼女を背負ってその場を後にする。

扇の家で目を覚ました彼女は記憶を失っていて、それが後々の騒動の切っ掛けとなるのだが、それはまた別の話。

《おまけその2》 全てが終わった後辺り

「そういえば君、ずっと黙ってるけどどうしたの？」

「……………」

「…………あれ？ 寝てる、疲れてたのかな？」

C. C.、初動時の加速で頭部を激しく打ちつけ気絶。

その後も束のC. C. をまったく意識しない無茶な操縦に付き合
わされたためしばらく昏倒していたと判明するのはもう少し後の話。

天災兎は取引するようです

「ふうん、おおよそ研究内容は予想通りかな、《CODE ―R》に神根島の遺跡、いやあ東さんとしたことが前世の常識に囚われすぎだね、いくら科学主体の世界だからと言ってファンタジー要素がないとは限らないのにね〜」

空中投影型ディスプレイを貫通し、彼女は力なく机に倒れ伏す。彼女なりの照れ隠しだろう。

しかし、すぐに立ち直すと再びそれらを操作し始める。

「にしても、今の今まで考えたことなかったけどもしかしなくても日本が侵略された理由ってこれ？」

彼女の視線の先にあるのは神根島の遺跡の研究データ。

「そも、日本を占領しときながら中華のことをブリタニアが意識していないのが変だよね、いくら強大国だからってテロリストが蔓延してたら防壁の機能を果たさないもの、ましてやサクラダイトが採れる重要地帯をだよ、ふつつうに有り得ないよね〜」

統治もダメ、在留戦力もダメ、そもそも総督の人選がダメ。

いくら日本に戦力を残してしまっただけと言ってもまともに統治出来ていないのでは何時中華連邦に隙を突かれても不思議じゃない。こんなのでは本当にサクラダイト欲しさに戦争を仕掛けたのかすら怪しく感じるというもの。

「その証拠に昨日のあいつが総督暗殺したみたいだし、世間が重要地って言う割にはブリタニア側の関心が無さすぎ」

そう考えてエリアー総督府へのクラッキングを続けるが、期待したデータは手に入らない。

何かないかと隅から隅まで関係無さそうな物にまで目を通す。

「？」

すると、妙なものを見つける。

隠蔽されてはいるものの、定期的に研究データの一部が外部へ流出した形跡があった。

不思議に思い束は流出先を調べれば……そこは思いもよらない所

だった。

「ブリタニア本国首都ペンドラゴンと砂漠の無人地域ねえ……」

擬装^{ダミー}ではない、と束は考える。

自身の力量に絶対の自信があるのもそうだが、この二つの場所へ流出させられた理由もある程度見当がついていたからだ。

「砂漠は恐らく大規模な実験施設、無人つてことにはしておけばどんな非道なこともできる、そして、それを知る人物が本国にもいると言うこと、更にその人物はブリタニア皇族の懐に容易に間者を潜り込ませることができて、本国の首都にいてもおかしくない人物、……十中八九皇帝だよね」

今まで得た情報を組み合わせ、その結論に落ち着く。

「まだ第一皇子とかの可能性もあるけど、ブリタニアが急速に領土拡大を始めたのは現皇帝になってからのはずだから、ほぼ間違いはないと思う、なら突つくとしたらそっちだよね」

そうと決まれば、と束は早速ブリタニア本国へのクラッキングを開始する。

世界最高峰のブリタニアであってもこの天災を阻むことはできず、直ぐにセキュリティを突破され、機密という機密を全て曝すこととなった。

世に出ればブリタニアの支配力を揺るがしかねないそれらを適当に流し読みし、興味のないものには手をつけずそのまま放置、関係ありそうなだけをリストアップする。

「……何これ？」

その中でも特に重要に保護されたデータが目にと留まる。

ブリタニアでも皇族すらまともに見ることができないそれを開くと……束は深いため息をついた。

「何処のどいつが考えたことか知らないけど、にしても——」

「にしても、これは酷いわね……」

シヨートヘアの女性、セシル・クルーミーが呟く。

彼女の視線の先にあるのは彼女たち特派が製作していた試作型第七世代KMFランスロット、それが酷く破損した状態で格納されていた。

頭部やコックピットこそ無事だが、機体の装甲のあちこちが凹み、右腕は肘から先が切り落とされている。

自分達の持てる技術をすべて詰め込んだ最高峰とも言える機体が初戦でこの様な姿になってしまったことに言いようもない何かを感じているのだろう。

「ほんと、ブレイズ・ルミナスの上から叩き斬るなんてどういう構造なのか興味がつきないねえ〜」

彼女の背後から白髪の男性、ロイド・アスプルンドがやって来る。

「ロイドさん！ 会議は終わったのですか？」

「まあ、会議と言ってもほとんど罵倒と責任の押し付け合いでしかなかったけどね、結局は後任の方がいらっしやるまで保留、つてことになったよ」

そんなことより、と彼はランスロットに向き直る。

「映像から確認した限りだと、恐らく相手も第七世代以上のKMF、だけどランドスピナーやスラッシュハーケンがないことから見るに、そもそも設計思想が異なるものなんだろうね」

「ですが仮に同じ第七世代だとしても、あの機体性能は異常です」

彼女が思い返すのは撃破されたKMFから僅かながらも回収された敵性KMFの映像。

近接武装一つで戦場を駆け、ものの数分で此方のKMFを十二機も撃破する戦闘力。

同じことならランスロットでも可能ではある。実際にランスロットに乗った枢木サクが同様の戦果を叩き出している。

しかし、それでもランドスピナーを用いた高速移動にブレイズ・ルミナスと呼ばれるエナジーシールドで被弾を防ぐことくらいはして

いるし、何よりそのランスロットを白く光る剣でここまで破壊したのもそのKMFである。

「たぶんスザク君並みのデバイサーが乗ってるって言うのもあるけど、この関節部に見えてる人工筋肉がその答えだね」

ロイドは端末を覗きこんで該当箇所を示す。

「私も同じ考えですがそのような物であんな動きが可能なのですか？」

セシルも同じようにそこまでは考えていた。

医療用に人工筋肉を使用することもあるが、それをKMFに組み込むことなど前代未聞だったからだ。

「それがねえ、理論だけなら何年も前に提唱されてたんだなあ〜これが」

そう言っただけが取り出したのは一つの資料。

論文にしても厚さにしてもそこまでのものはなく、実証データも何もないただの仮説止まりのそれをセシルに手渡す。

「マッスルフレーミング？」

「そ、合成樹脂と電動シエルの芯をスクラダイト合金繊維で覆った特殊な人工筋肉、それ自体が発電機の役割も併せ持つことよって高出力かつ長時間駆動を可能にするって計画だったんだけどねえ、後少いで実験開始って時にアッシュフォード家が没落しちゃったもんだから仮説のまま終わっちゃったんだよね〜」

ガニメデのことといい運がなかったよね、と彼は付け加える。

「僕も一時期ランスロットに組み込めないかなって考えていた時期もあったけど、費用とか時間の関係で後回しにしてたんだよね……」

「それは一先ず置いておいて、……ロイドさんはあのKMFはアッシュフォードが製作したものと考えているのですか？」

「いや、それはないね」

バツサリと否定する。

「提唱していたお抱えの科学者は五年くらい前に死んじゃってるし、何よりあまりにもセオリーを無視しすぎている、まるで素人か子供がKMFを造ったみたいになんか感じがするんだよね、これ」

食い入るように画面を注視するロイド。

その瞳には科学者としての好奇心と、それを先に実現された事に対する僅かながらの悔しさが見て取れる。

「ではまさか、あれはテロリストたちが造ったものと言うことですか？　それは」

「信じられない？　確かに未だにグラスゴーやその改造機を使ってる程度の技術力じゃこれは造れないよね、でも、それ以外ならどう？」
「それ以外、ですか？」

「例えば今の今まで潜んでいた秘密組織がテストを兼ねて暴れまわったとか」

「ロイドさん……もしかしてからかってます？」

思わず苦笑いを浮かべる彼女。

それもそうだろう。あまりにも現実的ではない、それどころか何処かの陰謀論者の戯言か、子供向けのテレビ番組くらいでしか見ることのないレベルの仮説なんだから笑うしかない。

「いんや、可能性の話ってだけ」

そうニヤつきながら話す彼に呆れたのか、それとも言い返すだけ無駄だと思ったのか、セシルは話題を切り替える。

「ランスロットの修理は予備パーツを用いることで何とかかなりそうですが、……スザク君の方はどうなりました？」

「先日現れたゼロって男の事もあって釈放されることになりそうかな、だから彼にはこのままデバイサーを続けてもらおうことになるね、だからそれまでにこれを取り付けないとね」

そう言っつてロイドはとある資料を取り出す。

「ロイドさん、これって——」

「そ、マッスルフレミングの実験データ、後回しにしてたとは言え材料とかある程度の目星はついてたからさ、この際完成させちやおうと思っつて無理言っつて実験してもらっつてたんだ」

あの鎧のこともあるしこうでもしないとあれに対抗できなさそうだしね、と付け加える。

「でも大丈夫なんですか？　このデータ通りだと確かに機体性能は向

上すると思うのですが、操作が」

「そこはほら、初めてであれだけ乗りこなせたんだからこれくらい問題ないと思うよ、……じゃあ早速改良に取りかかろうか、マッスルフレーミングの方も近い内に届くって連絡もあったし、それまでに出来るところは済ませとこう」

そうして、彼ら特派の一日は過ぎていく。

彼らの驚異的な技術力と張り切ったロイドの活躍により、次の総督、コーネリア・リ・ブリタニアが着任するまでにはランスロットの改良が終わっていたという。

その出来映えにロイドは大変満足していたが、その目の下には深い隈が出来ていたという。

エリアー総督クロヴィス・ラ・ブリタニアの死去、下手人とされた枢木スザクの処刑、そして彼を救った謎の男ゼロの出現。

エリアーは今混乱の真っ只中にあっただ。

その混乱を引き起こした張本人であるゼロことルルーシュ・ランペルージ、本名ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアもまた混乱の最中にあっただ。

彼はシンジユク事変の際、謎の女C.C. から目を合わせた相手に一度だけだがどのような命令でも必ず実行させる絶対遵守の力、ギアスを手に入れる。

その後、彼はギアスと持ち前の知能で死線をくぐり抜け、実の兄であるクロヴィスを暗殺する。

ここまではまだ良かった。容疑者に彼の親友である枢木スザクが挙げられ、また無実の罪で処刑されそうになる事態が発生するが、これも奇策とギアスで解決したのでまだ良い。

だが、死んだと思っていた女がいつの間にか最愛の妹ナナリーと接触し、更には余計なことを吹き込もうとしたり、あまつさえ学園内を気ままに徘徊する始末。

しかし、これもまあ良い。彼なりにフォローはしたし致命的な事態にはならなかったのだから。

彼にとつて最悪だったのは、予想外の出来事がまだ終わらなかったということ、そしてそれこそが今後の彼の予定の成否に関わるほどに凶悪な力を持った天災だったということだった。

「やあ」

自室に帰ると謎の女が増えていなんて誰が想像しよう。

正確に言えば彼のベッドに腰掛け気軽そうにこちらに手を振っている何故かうサミミを身に付けた美少女がそこにいた。

「誰だお前は!!」

当然、部屋の主であるルルーシユは彼女を問い詰める。

無論、騒がれては不味いのは此方も同じなので扉が閉まったのを確認した上で。

「あれえ、ちゃんと言わなかった？ 後で話を聞かせてもらうって」

それを聞き、彼は一っだけ該当する出来事を思い出す。

白いKMFから自分を守った黒い鎧を纏ったKMF。

確かにあれのパイロットの声は目の前の女のそれと似ている気がする。

「貴様、どうやってここを突き止めた」

静かに見守っていたC・C・Cが問いかける。

冷静そうに装ってはいるが、彼女もルルーシユに負けず劣らず内心は焦っているのには変わりない。

「突き止めるだけなら簡単だったよ」

そう言つてタブレット端末を取り出してとある画像を見せつける。「なに!？」

それは紛れもなくルルーシユやC・C・C、更には枢木スザクが写った画像。

C・C・Cと初めて出合い、またスザクと再会したあの時の場面そのものであった。

あの廃墟にそんな物が仕掛けられているとは露にも思わなかった彼は驚愕する。

「学生服が特徴的だったからね、後は適当にクラッキングして顔を確認めれば、それでおしまい♪」

端末を持ったまま立ち上がり、彼へ近づく。

「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア、7年前に本国から日本へ人質として送られるも直ぐに戦争が再開、つまりは実の親から見捨てられた形になり、本国では死亡扱い、そして母親の縁からアッシュフォード家の庇護下に入り、姓をランペルージと偽り妹と共に一般ブリタニア人としてここに暮らしているってことで合ってるよね？」

笑顔で彼へと問いかけるも返答はない。なくてもこれが正解だと確信している彼女にとってはどうでもいいことだが。

「で、約束通りあの時のあの場所で何があったか教えてくれるかな？」

ずずいとルルーシュに顔を近づける彼女。

まるで全てを見透かすような赤紫色の瞳に怯みそうになるが、これはチャンスでもあった。

「そうか、知りたければ教えてやろう」

「ほんとに！ やったー！！」

嬉しそうに万歳したり、くるくると回り出す彼女。

そんな彼女の瞳を見つめて、ルルーシュはこう言った。

「そうだなお前は全てを話して、ここを去りその後俺たちのことは忘れるがいい」

誰にも把握されず、また証拠も残らないこの力、ギアス。

いくら情報収集能力に優れていたとしても、生身である以上この力には逆らえない。

C・Cも特に反対する理由もなく事態を見守る。

彼女にとっても目の前のウサミミ女は邪魔者であり、ここで消えてくれるのなら止める理由もない。

こうして謎の女は知りうる全てを話した上でここを去り、全ては解決する……はずだった。

「うーん、残念だけどそのお願いは聞けないなあ、具体的に言えば好感度が足りないよ」

そう当然のように断る彼女。

だが、その行為にルルーシュとC・Cは驚きを隠せないでいた。「(馬鹿な、ギアスは確かに掛かったはずだ、なのに何故何の効果も出ていない!?)」

必死に思考を巡らす。

何があつたか、何故こいつにギアスが効かないのか、何か間違いがあつたのか。ここ数日で自身で収集したギアスのデータを元に考え、一つの結論に至る。

「まさか」

「お？ 分かつちやつた？ 分かつちやつたかなー！」

嬉しそうに懐から取り出したのは小さな円形の入れ物。

そう、ちようどコンタクトレンズを入れているような、小型の。

「……そう言うことか」

遅れてC・Cも気づく。

種明かしをすれば簡単なこと。

ルルーシュのギアスは相手の瞳を直接見なければ発動しない。ガラス越しや鏡などの反射は有効であるが、サングラスや映像越しなどの場合には発動することはない。

分かつていれば事前に対処できることであり、サングラスをかけるか最悪ルルーシュの目を見なければいい。

彼女がしたのも同じこと。

事前に瞳と同じ色の特殊なコンタクトを着用していたというだけ。

だが、これはルルーシュにとって今が最悪に近い状態と言うことを示していた。

「ほんと、テロリストが蔓延してる地域にしてはここは平和ボケしてるよね、どこを見ても間抜けな顔をした学生やブリタニア人ばかり、花壇の花が一輪増えてたり、廊下の電灯や教室の机がいくつが新しくなったり、餌を運ばない働き蜂が数匹紛れ込んでたりしても全然気がつかないんだから」

彼女の肩に一匹の蜂が肩に止まる。

束がそれを摘まむと腹部が縦に割れ、そこからUSBメモリのコネクタ部分が露出する。

「なるほど、こちらの情報は全て筒抜けということか……」

対策を用意できたのはルルーシユのギアスのことを知っていたからと言うことに他ならない。

つまり、此方の手の内は全て知られている可能性が高い、いや、あの情報収集能力を考えるなら知らないことはないと考えたほうがいい。

奇策謀略を得意とするルルーシユにとって、これ以上ないほどに最悪な状況だと言えた。

「貴様、何が狙いだ？」

「ふふ、さあ？ 当ててみれば？」

C・Cの問いに問いで返す彼女。

何を考えているのか理解できない。

その笑みの下で一体何を考えているというのか、ルルーシユは必死に考えを巡らせる。

「(どうする、実力行使は得策ではない、ここまで来ておきながら手ぶらとは考えづらい、俺なら何らかの対抗策を用意した上で足を運ぶからな、……最悪爆発物を仕掛けられている可能性もある、考えろ何か策は——)」

打開策を練ろうとして、ふと思った。

どうしてこの女はルルーシユに接触などしたのか？

ここまで追い詰めているなら接触するなんてマイナスでしかない。無駄なリスクを増やすだけの行為などする意味がない。

「(ここまで調べあげておいて何故何もしてこない？ その気になれば待ち伏せなり、薬を盛るなり何でも出来たはずだ。それをしてこないと言うことはする気がない、または意味がないと言うこと、みる限りイレブンだからブリタニアの味方をする意味がないのは理解できないことはないが、それでもゼロ^俺を捕らえない理由にはならない、ならばこの行動に何の意味がある？ こいつの狙いは何だ?)」

解らない。目の前の女の考えが読めない。

明らかに無意味なこの行為に何の意味がある？

「まさか本当に話を聞きに来ただけ？ それにしては手間を掛けす

ぎている、そもそもギアスのことを調べあげた時点で答えは得たようなものだ、それこそ聞きに来る意味がない、では次に考えられる彼女の狙いは何だ？ 俺に接触する必要がある、それで尚且つ俺である必要があるもの、俺が持ちうる手札は何だ？ 皇族、知能、ギアス、ゼロ、……いや待てよ)」

ゼロ、と考えた所で何が引つ掛かる。

そう言えば出会ったときこいつは何と言っていた？

「聞き間違いでなければ単独でブリタニア相手にテロをやっていると
言っていた、ならこいつはブリタニアの敵と言うことになる、今までの言動や俺の現状等を考慮にいれた上で導きだされる答えは——）、
成る程、そう言うことか」

考える全てを計算し、得られた答えは単純な物だった。

「お？ 答えが出たようだね、じゃ答え合わせといこうか」

静かに見守っていた束も漸く話し出す。

「お前は終始圧倒的有利にいたにも関わらずこちらのアクションを待った、やや回りにくどいとは思いますが、それらが敵対行為ではなく自分の売り込みと考えれば納得がいく」

「ほう……」

C・C・が興味深そうにルルーシュを見つめる。

「ギアスのことは取引材料になりえない、皇族の地位は既に意味がない、となれば残るは反ブリタニアとしてのゼロ俺しかない」

ルルーシュの答えを何も言わずに見守る束。

ニコニコと笑みを浮かべているが、相変わらず何を考えているのか読み取ることはできない。

「お前の狙いが何かは解らないが、それは現状、特にブリタニア皇国が行っている何かが都合が悪い、それをなくしたいが単独勢力故に手が足りない、だからこそこらのテロ兵リストではなくまずは特異な力を持った俺に声をかけた、……違うか」

「ピポピポピポーン！ だいせーカーい!!」

パーン、と何処から取り出したクラッカーを鳴らす彼女。

「いや〜日本解放戦線も選択肢にはあったんだけどね、でもあそこむ

さ苦しいし、何より藤堂って人以外は殆んど有象無象の雑魚しかいないんだもの、拍子抜けだよな〜」

それに対して、と束は続ける。

「君は割といい線いってるよ、個人的な資質も申し分ないし、何より幾ら超自然的な力があるからって大衆や警備のど真ん中に身を曝すなんて真似はそこいらの人間には出来ない、綿密に練られた計画と覚悟があつてこそできる芸当だよな、そんな君だからこそ、私は協力を申し出る気になつたわけさ」

「では、具体的に俺は何に協力し、逆にお前は何を与えることができる？」

「束さん的にはもつと詳しいデータが欲しいんだよな、脳波とかバイタルとかそのギアスが人体にどの様な影響を与えるのか長期的にデータ収集するのが目的」

「……今まで集めた物では不足と言うことか？」

「私自分で集めたデータしか信用しないから、それで私は君に医療なり武力なり科学技術なり、できる限りの協力はするつもりだよ」

医療、と聞いた所でルルーシユの右手人差し指が僅かに動いたのを束は見逃さなかった。

「まあ、詳しい話は追々するとして、……どうする？」

このどうする、とは聞くまでもなく協力関係になるか否かと言うことに他ならない。

ルルーシユは考える。

確かにこいつのKMFや情報収集能力は驚異的と言える。がしかし、だからと言ってそう易々と協力を確約して良いものか？

ナンバーズ制度の崩壊とは、そのままブリタニアの崩壊に直結する。

ブリタニアは既に属国無しでは存続出来ないほどに膨れ上がっており、それは国民も同じことが言える。

ナンバーズが居なくなれば、その状態に慣れきってしまったブリタニア国民、特に貴族たちに今まで好き放題していたツケが回ってくるだろう。

政治や生活が破綻した国は最早国とは呼ばない。

目的だけ見れば俺の目的とも合致する。

だが、それ以上にこの女の得体の知れなさはどうだ？

少し前に一言二言話しただけの女を信用して良いものか？ むしろ信用できる要素の方が少ないような気すらする。

「いや、リスクを恐れては何も出来るわけがない」

ブリタニアの罫の線は既に消えた。

こいつの言っていることが嘘偽りの可能性は低い。

何よりこいつがブリタニアの敵と言うことは疑いようはない。

この程度の不確定要素を御しきれないようでは大国を壊すなんて夢のまた夢。

「良いだろう、ブリタニアを倒すまで協力といこうじゃないか」

「うん、じゃあ宜しくね☆」

こうして、人知れず二人の盟約は結ばれる。

これが後の世にどれ程の影響を与えることになるのか、まだ誰も知ることがなかった。

天災兎は引つ掻き回すようです

「あはははははは!!」

自分専用の薄暗い研究室で一人腹を抱えて笑う少女が一人。

トレードマークのウサ耳型デバイスを揺らし、彼女は笑いを堪えずにいた。

「いやあ。まさかまさか猫に仮面を取られるなんて、本当に彼は面白いことをしてくれるね」

本人が聞いたら必死に反論しそうな言葉だが、残念なことにここには彼女しかいなかった。

「けど、やっぱり少年期特有の甘さが残ってるように感じるよね彼。そこらの有象無象よりかは大分見込みはあるんだけど、このまままだといつか取り返しのつかない失敗をしそう」

前世からの経験と今までの見識からそう思う彼女。

自分も今は少女であることには違いないのだが、どうも前世からの年齢で記憶が連続している為か、彼女自身が少女である自覚が薄れていた。

「まず必要なのは優秀な駒よね。けど今の日本にそんなの全然ないし、ギアスで従わせてもその他が面倒なことになるし……まあ最初は地道に草の根活動かな。そのために必要な装備は」

目にも留まらない速さで空中投影型キーボードを連打する。

恐ろしい速さで膨大な量のデータが入力され、新たな装備の設計図へと姿を変える。

「……まあ最初はこんなところかな？ 次は専用KMFと量産タイプの設計しないと」

既に常人では追いつくことも出来ないスピードと精密さで新兵器を設計し始める。

これは本来国家機関が優秀な人材を集めて行わせるものであり、このように個人がまるでお菓子作りのような感覚でできるようなものなのではないのだが、既に数世代先の技術を生み出している怪物には関係のないことだろう。

こうして人知れず彼女の兵器開発は続く。すべては平和になった世界でISを広める為に。

数日後、彼、ルルーシュ・ランペルージは彼女、篠ノ之束の予想どおりに危機に陥っていた。

事の発端は新たにエリアー1の総督となったコーネリア・リ・ブリタニアが起こしたとある作戦である。

サイタマゲットーでの軍事作戦の際その状況をシンジユク事変の時と酷似するように調整し、さらに作戦時刻をあえて公にすることによってこの地で兄クロヴィスを殺害した犯人、ゼロを誘き出そうとしたのだ。

彼は目論見を看破していたものの、あえてその誘いに乗ることにした。

サイタマゲットーにもシンジユクと同じようにテロリストは掃いて捨てるほどにいる。彼らを利用すれば自分ならばコーネリアをも打倒できると考えていたからだ。

だが、それは彼の思い上がりであったと思いつくことになる。

コーネリアの優れた兵士に比べ、テロリスト風情では鍊度も頭のゆきも足りず、勝手に動いてはブリタニア軍に殲滅されていく。指揮する人物は同じレベルでも下につく人間でこうも結果は変わってくるのだ。

最悪でも勝負にはなると踏んでいた彼だったが実際にはどうだ、これではゲームにもなっていない。

敗北、圧倒的な敗北だった。

しかし、それでもなお彼の考えは甘かったと知ることになる。

なんと、コーネリアが自身の配下の全KMFパイロットにコックピットを開け素顔を晒すように命令したのだ。

自身の配下にゼロ、もしくは反乱分子が紛れ込んでいないかと疑っ

た故の命令であるが、これがまずかった。

なにせそのゼロ本人が、ルルーシュがコーネリアの部下に紛れ込んでいるのだから。

絶体絶命のピンチ、あわやルルーシュの命運もこれまでかと思われたその時だった。

「……はあ、この手だけは使いたくなかったが、仕方ない。俺の負けだよコーネリア」

そうルルーシュがつぶやくと、懐から可愛らしいウサギのマークがあしらわれた小さなボタンを取り出した。

それは今回の作戦に単身で乗り込む前に彼女、篠ノ之束から無理やり持たされた「緊急兎さん呼び出しスイッチ」である。

話を聞くところによればこれを押せばどこでも兎さん（本人がそう言った）が駆けつけてくれるもの、らしい。

押せばどうなるかなどは詳しいことは一切不明なので今回の作戦には組み込まなかったが、このような状況に陥ってしまったてはそうも言っではいられない。

藁にもすがる気持ちでルルーシュはそのボタンを押した。押してしまった。

その瞬間、コーネリアは知ることとなる。

このエリアー1にはゼロ以外にも駆逐せねばならない狂人がいることを。

『はいはい、どうやら危機的状況のようだねゼロ様、あ、そっこの声は聞こえないからこつちが一方的に話すけどさ。やっぱりそのゴロツキ相手じゃ無理だったよね。まあ仕方ないことだけだよ。やっぱりごろつき程度じゃ正規軍相手には限界があるよね』

そんな気の抜けた音声サイタマゲッター全域に響き渡った。そう、全域である。

ゲッター内の使用されなくなった電話やコーネリア率いるKMFの拡声器、さらにはG-1ベースの艦内放送に至るまで、その全てが彼女の声を流し始めたのだ。

「どうなっている!?! なんだこの声は!?!」

「わかりません！　ですがG―1ベースのみならずKMFに至るまでハッキングを受けている模様！」

「なんでもいい！　逆探知は可能か？」

「現在ハッキングの対処と並行して行っておりますが、もう少し時間がかかるかと思われます」

コーネリアは自身が座っている指揮官席の肘掛けを乱暴に殴りつける。

あともう少しで作戦はこちらの完勝で終わり、ゼロすらも捕らえることが出来たかもしれないところに水を差されたのだから無理もないだろう。

『とりあえず連携と戦線をぐっちゃゴチャに引つ掻き回すから、ゼロ様はその隙に逃げてね。さーて、ブリタニア軍もといコーネリア殿下、その命までは取らないでいてあげるけど、ちよつとの間遊んでもらうよ〜』

「させると思うか不埒者が！　全KMFに告げる！　先の命令を中断し、センサーをフル活動させて強襲を警戒せよ！」

謎の相手からの宣戦布告に対処しようと集めていたKMF部隊に周囲を警戒させる彼女、しかし、その命令は結果的に果たされることはなかった。

「何?！」

一番最初に異変に気がついたのはG―1ベース司令室の前方窓際付近にいたダールトンであった。

彼自身も部下に探らせるだけではなく窓から周囲を目視で警戒していた時に、眼下に集まっていたKMF部隊が目に入ったのだ。

そう、コーネリアに忠誠を誓っているハズの自身の部下たちが一斉にこちらへ銃口を向けていたのである。

「お下がりにください姫様!!！」

彼は叫ぶと同時にコーネリアの盾とならんと走る。

直後、彼がいた場所をKMFの銃弾がまるでスコールのように襲い掛かった。

荒れ狂う嵐はすぐに収まったが、それ通り過ぎた後はまさに惨状で

あつた。

運悪く銃撃に巻き込まれ命を落とす者もいればかすり傷程度で済んだものもある、しかし何よりも酷かったのはその司令室である。本来前方付近にあつた天井は銃撃で削られ、まるで大きな手でちぎりと取られたかのように無くなっていったのだ。

「まさか、我が軍全てがイレブンどもに乗っ取られていたとでも言うのか!？」

「いえ、各KMFから緊急通信が入っています！ どうやら操縦系統に乗っ取られている模様!!」

「そんな馬鹿なことがあるか!? 常時ネットワークにつながっている端末ならわからなくもないが、KMFをハッキングするなど聞いたことがないぞ!」

彼女の部下の一人がそう叫ぶ。その姿は非常に見苦しいと感じるものではあつたが、内心コーネリアも同じような思いを抱いていたのだから責めるに責められないでいた。

「(馬鹿な。ここにあるすべてのKMFを手中に収めることなど本国のどの技術者でも不可能な芸当だ。それがこの辺境の、ましてやテロリストどもの中に紛れ込んでいるなどとは、考え難い)」

敗戦国。それも何年も前に支配下に置かれたその地域からこの世の誰も足元に及ばないハッカーが誕生するなどは予想できるはずがなかった。

そして、天災の遊戯はこれで終わりではない。

『アーテステス。唐突ですがこれからクイズをしたいと思いまーす。出題者は私、回答者さんはコーネリア総督率いるブリタニア軍の皆さんでーす!』

あいも変わらずふざけた調子で話し出すその女。

もて遊ばれている、そう伝わってくる音声に、怒りのあまりコーネリアは思わず手を置いていた肘掛けの先端を握り壊してしまう。

『問題は簡単、今からとある装置を起動させるからそれを追って中身を確かめるだけ。そのどれかにゼロ様が入っているから、欲しければ追ってみれば。たーだーし、追い切れたららの話だけどね』

ポチツとな、そう彼女がつぶやくと、空になった銃を構えていたK MFたちが一斉に動きはじめる。

彼らはそれぞれ別方向に背を向けたかと思うと、一斉に脱出装置を起動させ、コックピットを各地へ射出し出したのだ。

「何!?! 彼らの信号はどうなっている!?! それを追えば」

「不可能です! たった今すべての識別コードが消失、追跡は不可能です!」

「ならば、残った部隊員は目視で彼らを検索しろ! 車でも徒歩でも何でもいい! 奴を、ゼロを逃すな!!」

メガネをかけた男ギルフォードがそう指示を飛ばす。

彼らの尽力もあって各地に飛び去ったすべてのコックピットブロックは回収できたものの、肝心のゼロは捕らえることはできなかった。

「おかえり……なんともひどい顔だ。何か嫌なことでもあったのか?」

「ああ、急にジェットコースターに乗せられて雑な着地をさせられたからな。おかげで後頭部を強打する羽目になった」

「それは難儀だったな。だが、これでお前も理解しただろう」

「ああ、ブリタニアを壊すには俺一人の力では無理だ。俺の手足となる駒がいる」

「ならば結構、私も契約を果たされるまで死んでもらっては困るからな」

とある夜の出来事、このような会話が行われていたことなど、誰も知らない。

天災兎は用意するようです

「……………何これ」

赤い髪を尖らせるようなヘアスタイルの少女、表の顔はシユタツトフェルト家の御令嬢としてアツシユフオード学園に通うブリタニア人と日本人のハーフ、紅月カレンが見たものは新たに与えられた驚くべきものであった。

つい先日まで少女ながらもテロリストとして活動し続け、KMFの操縦に至ってはチームの中で足元に及ぶものがないほどに上達するなど並外れた才能を露わにしていた彼女だったが、その活動が実を結ぶことはなくこのまま一テロリストとして無意味に命を落とすのを待っただけかと思われた。しかし彼らに救いの手を差し伸べるものがいた。

それが先日のトウキョウゲッターにて彼らを指揮し、窮地を救った存在ゼロである。

仮面で顔を隠し、怪しげな衣装に身を包む彼を誰もが最初は不審に思ったが、彼と接しているうちに皆徐々にその手腕を認めることとなった。

特に先日のカワグチ湖の件もそうだ。

ブリタニア軍が完全包囲している中正面から堂々と侵入し、人質を全員救出した上に彼らに捕まることなく脱出させた、まさに奇跡しか言えないその結果に皆は納得するしかなかった。

彼ほど先導者としてふさわしい存在はいないと。

その事件から程なくして彼らは再び呼び出されることとなった。

「黒の騎士団専用のKMFが仕上がったから皆に受け取ってもらいたい」要約すればそんな話を彼らはゼロから伝えられた。

KMFは確かに彼らも所有してはいるが、それは時代遅れのKMFを拙い技術で修繕した出来損ないであり、とても兵器と呼べるような代物ではない。

彼らは喜んだが、当然そんな旨い話があるかと疑うものもいた。

半信半疑、言葉で表せばそのような心境で彼らは指定された場所へ

と向かう。

そこで彼らが目にしたのは、自分達の人数よりも多く用意された新品のKMFの数々であった。

古き日本の武者を彷彿とさせる鎧状の装甲、左腰に備わった日本刀らしき武装、そして右腰と背部に背負った三丁のマシンガン。

誰が見ても新品、それだけではなくブリタニア軍の主力KMFサザランドにすら引けを取らないように思えた。

「えっと、あれとあれはもう用意したから、次は専用機開発……ん？ やっぱこれ一機じゃ出力が足りないよね。二機くらい繋げないと厳しいか」

彼らが驚愕する中、奇妙な女が彼らの前を悠然と通り過ぎる。

見た目はカレンと同じ歳くらいの日本人の少女、頭にうさ耳をつけワンピース姿という格好でなければこの日本のどこにでもいそうな少女である。

唐突に右の奥、機体の影から出てきたかと思えばスタスタと彼らの前へ近づいてくる。

「迷子か？ と誰かが口にするが、彼女がゼロの関係者ではないと言う保証もない。」

「お、おいちよつと待て、なんでガキがこんなところにいるんだよ！」
見た目からして迂闊そうな男、玉城真一郎が彼女へ声をかける。

しかし彼女はそれに気づくことなく通り過ぎ、近くにあった机に座り込むと端末に何やら入力し始めた。

「おい、無視すんなよな！」

無視されたのかそれとも気づかなかったのかはわからないが、無視されたと感じた玉城は彼女へ近づきその肩に乱暴に手を乗せようとした。

「あえ？」

その手が触れる直前、彼は奇妙な浮遊感に襲われた。

見れば自身が見ていた光景は椅子に座る少女ではなくこの施設の天井へと写り変わっている。

理解が追いつかず、脳内が疑問で埋め尽くされる玉城。

何が起こったのか、それは玉城を除く彼ら全てが目撃していた。

玉城の気性が荒いのはいつものことだが、見知らぬ少女にまでそう接するのはやりすぎだろうとこの集団のリーダーであった扇が止めようとした時だった。

彼の手が彼女に触れるその瞬間、作業をしていた彼女の左腕が玉城の腕を掴むと、そのまま後ろへ投げ飛ばしたのだ。

完全に腕の力だけで行われたその神技、もしかすれば合気道にも通じる何かがあったのかもしれないが、その心得がない彼らには理解はできない。

大人一人を片手で投げ飛ばす少女、もうすでに彼らの中では彼女は只者ではないと確信していた。

「……………ん？ ああごめんごめん、来てたのに気がつかなかったよ。君たちが彼が言っていた組織の構成員たちだね」

作業がひと段落したのか、腕を組んで上へ上げ背伸びをした彼女がこちらを見てそう言った。

「えっと、気づいてなかったのですか？」

「うんそうだよ。いやー私って集中すると周りが見えなくなるタイプだしさ。今も新兵器の構想を練ってたから忙しくてね」

「いえ、そっちじゃなくて、あれについてなのでですけど」

代表して扇が話しかけるがどこか噛み合わない。

恐る恐る扇は指をさし、地面に転がっている玉城に視線を向けさせる。

「え、何あの人床に転がる趣味でもあるの？」

「いやいやいやいや、俺を投げ飛ばしたのはオメーだろうが!!」

驚き奇怪な目で玉城を見る彼女、ようやく自分が何をされたのか理解できた玉城は納得いかないと叫びながら起き上がる。

「あく君私に触れようとしたでしょ。だめだよ許可なく乙女に触れたら。特に集中している時なんかは無意識に投げちゃうし、最悪死ぬかもよ」

ケラケラと笑いながらそう告げる少女。

どうやら本当に投げた自覚がないらしい。

「長話もそこまでにして、いい加減このKMFについて彼らへ説明してくれないか。篠ノ之」

「ゼロ!？」

コツコツと足音を響かせて、基地の奥から怪しい男、ゼロが現れる。はーいと軽く返事をして、彼女は彼らに向き直る。

「私の名前は篠ノ之束、稀代の天災にして黒の騎士団の兵器開発担当主任! これから君たちのKMF、この『呉羽』の製造改造調整をする者だよ。まあほどほどによろしくね!」

一部ニューアンスがおかしかったりするがそれを気づくものはいない。

「詳しい機体説明はそこにマニュアル作っておいたからそれを十分に読みこんでね。操縦に不安があるのなら格納庫端に設置してあるシミュレーターがあるからそれ使って、最大四人までできるから。以上何か質問は? ない? それじゃ私はこれで」

一人で勝手に喋り、そして勝手に去ろうとする彼女。

流石にそれで納得する人間は居らず、カレンが急ぎ話しかける。

「ちよ、ちよつとまちなさいよ! そんな一氣に言われても全然理解でき」

「あ、忘れてた。これあげるね」

カレンの話を聞かずにどこかへ消えようとしていた彼女だったが唐突に何かを思い出すとポケットから赤いUSBメモリに近い構造の物体、特殊な装飾が施されたKMFの始動キーを取り出し、それをカレンへと投げ渡した。

「おつとつと……あの、これは?」

「呉羽じゃ君のスペックを活かせそうにないから専用機を用意しておいたよ。端のところにおいてある紅い機体がそうだから、がんばつてね」

言われこの場所を隅々を見渡すと悠然と並ぶ呉羽の奥に、異なる機体が二機あるのに気がついた。

一騎は呉羽の頭部をカラーチェンジした機体。カラーリングから見るに恐らくはゼロ専用機体だろう。

その対面に直立不動でたたずむ機体、赤と黒のツートンカラーの鎧に両肩についた大剣らしき物体、さらに両腰に設置された大型のスラッシュハーケンが特徴的なそれはまるで彼女を待っているかのようそこに佇んでいた。

「あの、あれは……てもういない!？」

視線を彼女に戻すが東の姿はなく、既に去った後のようだ。

「すまないな。彼女は腕は確かなのだが、性格に難があつてな……本当にそこを除けば優秀な協力者なのだが」

「!? い、いえ! ゼロが謝ることはありません!」

呆然としているカレンにゼロが声をかける。

その言葉にはどこか同情のようなものが含まれていて、彼もあの少女に苦勞をさせられているのだろうと察することができた。

「今日は一日このナイトメアに慣れる訓練にあてる。これをグラスゴーやサザーランドと同じと思うな。スペック上ではグロースターすら上回るじゃじゃ馬だ。地下の演習場で十分に試乗を終えたのなら明日に備えて今日は解散していい。明日からは黒の騎士団としての活動を本格化していく予定だからな」

その宣告に、その場にいたもの全員から歓声上がる。

悪きブリタニアの者どもに虐げられた自分たちが鉄槌を下せる日が来たのだと喜んでいるのだろう。

その後、去りゆく彼の姿を見送り、彼女は用意された機体の前に立つ。

そこには段ボールの上に丁寧に置まれた新品のパイロットスーツと【紅葉・操縦マニュアル】と書かれた機体説明書らしき分厚い書物が置いてあった。

「紅葉か……まあ、見た目に反して可愛い名前ね」

これもあの女の趣味なのかしら、と呟きつつ、カレンは説明書に目を通す。

所々妙な単語が載ってはいるが、読めないことはない。

読めないことはない、のだが……。

「何、これ………」

そこにはこの機体に秘められた驚くべき性能がありありと記されていたのだった。

アツシユフオード学園。その校内にて談笑する二人の姿があった。ただし、一人は楽しげに話すのに対し、もう一人はそれを受けて苦笑するばかりであるが。

「でねールルーシユ！ 次の学園祭はもつとこうパーツと派手にいきたいわけよ!!」

「はいはい、会長の思いつきはいつものことですけど、常識的な範囲にとどめてくださいね……」

アツシユフオード学園生徒会長にして理事長の孫娘、ミレイ・アツシユフオードと生徒会副会長ルルーシユ・ランペルージである。

彼らの話題は今度の学園祭のことなのであるが、当のルルーシユの脳内では別のプランが組み立てられていた。

「(デートハルトからの情報によればナリタ連山にて大規模な掃討作戦が開始されるらしい、詳細は不明だがこれは篠ノ之に情報を集めさせれば解決する。だが、そうなると肝心のナナリーの手術の日程が遅れることになる……いや、そこまであいつを信用しているわけではないが、与えられた情報を冷静に分析すると目はともかく足は治る確率が高い。ただし、それは篠ノ之自身が手術を行なった場合に限る。今までのどの医者も頼っても無理だったナナリーの足が治るのは喜ばしいことだが、本当に頼っていいのか？ あんな奇人変人をそのまま実体化させたような不審者に？ しかし現状打つ手がないのもまた事実。彼女が過去に行なった手術の患者も確認が取れたことから嘘ではないのは確か。だがしかし、それでもアレを信用すると言うのは

……」

今彼の脳内は今後の作戦プランとナナリーの手術のことが大半を占めていた。

今までどの医者を頼っても治らないと宣告され続けた彼女の足が治るといふ言葉に嘘はないことは彼もわかつてはいた。わかっていたのだが、いかんせんその言動がはやめちなあの女のことをどこまで信用すればいいのか決めかねていたのだ。

彼女の言動に嘘はない。それは短い付き合いであるが聡い彼にはすぐに理解できた。

ただ茶化すし、ふざけるし、言動はうるさいし、何より気軽に現代科学を超越するような発明品をポンポンと出してくる。

この前渡されたナイトメアもまた彼が頭を悩ませる要因でもあった。

確かに戦力は必要だ。いつまでも旧式のKMFではブリタニアに立ち向かうことなどできはしない。

それを一人愚痴っていたら、三日後にはアレらが用意されていた。性能はサザーランドどころかグロースターですら問題ない高性能の機体を人数分＋予備機までも用意されていたのだ。

それをどこから集めて来たかと問えば、そこらに転がってるスクラップとか原材料を盗んだりした、だそうだ。

あり得ない。言動もそうだがもたらしてくる成果すらも色々な意味であり得ない。

心因性の頭痛に襲われた彼はとりあえずそこまで話したところで他の騎士団員を呼び出した。

早いうちにこの機体に慣れた方がいいと思ったからだ。

だが、これが意外と難しいと言わざるを得なかった。

何せ今までのポンコツナイトメアとも違う本物の高性能KMF。少しレバーを倒しただけでも急加速したり、壁にぶつかったりする者が後を絶たなかった。

初搭乗から三十分でこれらを乗りこなせたのはルルーシュとカレンのみであり、後の者がこれを使いこなすのにさらに数時間を要した

という。

閑話休題。

ともかく、齎される成果は間違いなく本物なのであるが、その行動など諸々が邪魔をして彼は彼女を信じきれずにいるのだ。

「あれ？」

「どうかしましたか会長？」

適当に話を合わせていたルルーシュは、会長の驚いた声に彼女が見つめている先へと視線を動かす。

「あれは……人？」

そこには、この距離でもわかるくらいに美しい銀髪を持った青年が、倒れていたのだった。